

稲作だより 第1号 育苗準備編

令和6年3月22日

最上総合支庁農業技術普及課 ☎0233-29-1329

令和5年産では、穂数を十分に確保できなかった圃場で品質が低下する傾向にありました。**品質・収量の安定には、初期分けつの促進による穂数確保が重要です。**

初期分けつを促すため、作業計画を立て、健苗を適期に移植しましょう。

播種量に合わせた育苗日数を

【播種量乾籾 150～180g/箱の場合】



【播種量乾籾 80～120g/箱の場合】



育苗中の病害防ぐために

【薬剤処理の注意点】

- 農薬ラベルに記載の希釈倍率・浸漬時間で処理する。
- 薬液の温度は処理開始時 10°C以上とする。
- 化学農薬の薬液量は、種籾と同量とする。
- 薬液に浸したら種子袋を揺すり、薬液を内部まで行きわたらせる。

【温湯消毒の注意点】

- もち品種は発芽率が低下しやすいため、温湯消毒を避ける。
- 保温機能がある場合、「58°C 20分」または「60°C 15分」で処理する。
- 浸漬直後に種子袋を上下し、中心部の温度を速やかに上昇させる。
- 温湯消毒後は直ちに水で冷却し、そのまま浸種する。
- すぐに浸種をしない場合は風通しの良い日陰に吊るして保管する。

【育苗箱・機材からの感染を防ぐ】

昨年度、育苗中に病害が多発した場合、育苗箱や機材に病原菌が残っている可能性があります。育苗箱や機材の洗浄・消毒を実施しましょう。

浸種時の温度に注意必要！

| 品種 | 積算水温 | 浸種日数の目安 |
|--|-------|-----------|
| はえぬぎ、雪若丸、つや姫、あきたこまち ひとめぼれ、コシヒカリ、山形95号 | 120°C | 10°C×12日間 |
| ササニシキ、ヒメノモチ | 100°C | 10°C×10日間 |

令和5年産種子は高温登熟により休眠が深くなっています。出芽ムラを防ぐために、いつも以上に水温等に注意が必要です。水温が低すぎると発芽率が低下するため、**水温が10°Cを下回る場合は、温水を加えるなどして水温10~15°Cにし、十分な浸種日数を確保します。**

浸種中は病原菌の飛び込みや水温の上昇を防ぐため、浸種桶は日陰や屋内に置き蓋をします。2~3日おきの水交換が基本ですが、薬剤消毒の場合には、浸種初日から3日間は水交換を控えましょう。

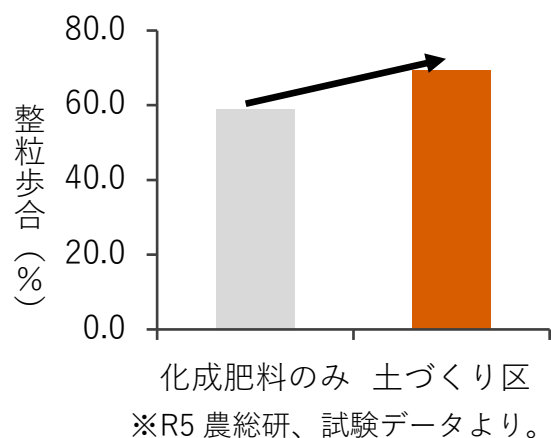
催芽はハト胸を確認

催芽は水温30~32°Cとし、20時間浸漬を目安にハト胸(根と芽が1mm出た)状態となるまで行います。「ヒメノモチ」は伸びやすいので、伸ばしすぎに注意しましょう。

遅れずに圃場準備を

高温登熟年であった令和5年度は、土づくり資材の連用圃場で品質低下が軽減される事例が見られました(右図、土づくり区:ようりん30kg/10a+ケイカル150kg/10a)。土づくり資材や堆肥を活用し、品質安定に繋げましょう。

融雪が例年より早い状況です。耕起等圃場準備作業も計画的に進めて、本年度稲作の万全のスタートを切りましょう！



育苗相談会 実施中！

方法：電話連絡いただくか、直接普及課にお越しくください。
連絡先：最上総合支庁農業技術普及課 ☎0233-29-1328、1329
期間：4月30日(平日9時~16時)まで